

○まず、グレゴリオ聖歌と同じテキストのポリフォニーをお聞きいただきます。

Busto (1949)はバスクの人、Telfer(1959)はカナダの女性作曲家、Gjeilo(1978・イエイロ)はノルウェーの若い作曲家、Sarasola(1960)も Busto とおなじバスクの作曲家。いずれも私より若く積極的に合唱活動を行っている人たちの作品です。

○第2ステージはフランスの宝物、Faure の作品を歌います。いずれも、美しく、優しく、メンバーは学生時代から、ミサの中で歌ってきた大好きな聖歌です。

○第3ステージは日本人の作曲家の作品を聞いていただきます。

千原英喜による1曲目はグレゴリオ聖歌の Ave marus stella と仏教の般若心経、そして16世紀に生きた大名の妻でありながらカトリックに帰依した細川ガラシャという人の和歌2首を組み合わせた、前衛的な曲です。1首は辞世の句であります。

2曲目は松下耕という作曲家の『3つの詩編』という合唱曲のなかから詩編23を合唱曲にしたものを歌います。「主は羊飼ひ」というPs.23は数多くの合唱曲がつくられてきました、シューベルト（独語）、ブスト（英語）などすぐに5指にあまります。

私は日本語によるこの作品ができたことがとても嬉しく、みなさまにお聞きいただきたいと思いました。

○最後のステージはメンデルスゾーンの『三つのモテット』から歌います。

メンデルスゾーンが20歳ごろ、彼はイタリアに遊学します。ローマでの宿舎は当時もう聖心会の物であったトリニタ・ディ・モンティの近所でした。彼は聖心会の修道女が歌う夕の祈りの歌声にしばしば耳を傾けたようです。1830年の暮れに聖心会の修道女のために、今日、第4ステージ冒頭の曲を書きプレゼントしているのです。残りの曲は1837年に書き上げ、1曲目と一緒にして『三つのモテット』として聖心会に献呈しています。1837年ということはこの経緯はきっとマザー・ソフィア・バラのお耳に入っていたらと推察します。今日、マザーのみ前で歌えますことは不思議な大きな大きな喜びです。